

幼児の発達とメタ認知的活動の関係 —発達検査事態に着目して—

田中道治(福山平成大学)

キーワード: 発達の形式, 発達の内容, メタ認知

問題と目的

養育・保育・教育を進める上で、一人ひとりの子どもの発達特性を客観的に把握しておくことが重要であろう。今日、子どもの成長・発達の層化現象が顕著に認められるようになり、親や保育・教育関係者の特別な努力及び工夫を必要としている。

子どもの発達を「できる」「わかる」といった能力に注目した形式的側面からのみでなく、活動目標の持ち方、解決への道筋、活動点検、あるいは結果の評価などの発達における内容的側面をも統一させてとらえることが重要であろう。この両者の統一状態を理解することで、子どもの発達の問題へのアプローチが進展するであろう。また、従来からの発達—差異論争における発達論の論点、すなわち同一の発達レベルの子ども間のパフォーマンスの違いを単純にモチベーション要因に帰すことなく、他の発達要因の関与の可能性をもたせてくれよう。

本研究では、子どもの発達の階層・段階を描くのに用いられる発達検査自体に着目し、得られるDA(発達の形式)に含まれた発達の内容を検査に向かう子どものメタ認知的活動の観点から分析検討する。

方 法

調査対象者

幼稚園年中クラスA児(男児, 4歳7カ月)、発達支援センターB児(女児, 4歳6カ月)

調査場面

新版K式発達検査2001を対象者に実施手順に従って適用する。対象者の遂行はVTRを使い録画する。併せて、子どもの遂行を、メタ認知的活動の観点からチェックする記録者1名が観察記録する。したがって調査場面は、被検査者の子ども1名、検査者1名、そして記録者(含VTR録画)1名、計3名から構成される。

調査手続き

対象者は4:0超~4:6の範囲にかかわる検査項目(認知・適応から言語・社会領域へと進む)を中心に検査を開始され、通過あるいは不通過の状況を踏まえて上限あるいは下限方向に進む。

メタ認知的活動は、モニタリング(難易の表情、見本と手元の見比べ、点検、評価、括り)及びコントロール(課題への集中、目標設定、計画性、修正)の2つに分けてチェックする。チェックに

際して、2度ともに3件法(見られない1—少し2—かなり見られる3)が用いられる。

結果と考察

発達検査事態における子どものメタ認知的活動の観察一致率は、A児71.4%、B児75.5%であった。

発達検査結果の分析

Table 1に示されるように、B児が生活年齢相応な発達レベル及び発達の進み具合であるのに対して、A児は年齢から幼児期中期であるが、発達レベルは後期に達していた。両者ともに発達機能の連関性には問題が示されなかった。

Table 1 対象者のDA及びDQ

	領域	発達年齢	発達指数
A児	姿勢・運動	(上限)	
	認知・適応	5 : 1 1	1 2 9
	言語・社会	5 : 0 2	1 1 3
	全	5 : 0 6	1 2 0
B児	姿勢・運動	(上限)	
	認知・適応	4 : 0 2	9 3
	言語・社会	4 : 0 1	9 1
	全	4 : 0 1	9 1

メタ認知的活動の分析

発達検査12項目に関して3件法結果をもとに分析した。Table 2に示されるように、A児及びB児ともモニタリングに比べコントロール活用率の方が高い傾向を示した。両者の比較では、A児がB児に比べて2種の活用率とも高く、特にコントロール活用率の高さが顕著であった。

Table 2 メタ認知的活動の状態

	モニタリング得点	コントロール得点
A児	1 0 0 / 1 8 0 (5 5 . 5 %)	1 1 7 / 1 4 4 (8 1 . 2 %)
B児	7 5 / 1 8 0 (4 1 . 6 %)	9 4 / 1 4 4 (6 5 . 2 %)

子どもの発達はメタ認知的活動の影響が考えられる。幼児の場合、能力の活用は比較的メタ認知的モニタリングよりもメタ認知的コントロールにより一層左右される傾向にある。今後、事例を増やし、メタ認知活動の詳細な分析が課題であろう。